

事業名	貝毒調査(漁場環境監視等強化対策事業)
予算区分	受託試験研究費(国補), 県単
事業実施期間	昭和54年度～
担当者	(環境増養殖担当) 朝田健斗, 吉田和貴
共同研究機関等	
<p>&lt;目的&gt;</p> <p>特定有毒プランクトンに起因する二枚貝類の毒化実態を把握し, 貝類の食品としての安全性を確保するとともに, 漁業や県民等への被害の未然防止を図る。</p> <p>&lt;方法&gt;</p> <p>本県の沿岸8海域(播磨灘, ウチノ海, 鳴門市中央部, 松茂, 徳島市, 小松島, 阿南市, 海部郡)及び小型底びき網漁場2海域(播磨灘, 紀伊水道)の計10海域(図1)を調査対象海域として設定し, 貝毒原因プランクトンの出現状況のモニタリングとカキ等二枚貝の貝毒検査を実施した。</p> <p>プランクトンモニタリングでは, 麻痺性貝毒原因種として<i>Alexandrium pacificum</i>(Group IV), <i>A. catenella</i>(Group I)及び<i>A. tamiyavanichii</i>, 下痢性貝毒原因種として<i>Dinophysis acuminata</i>及び<i>D. fortii</i>の出現を調べた。また, 貝毒検査は一般財団法人食品環境検査協会に依頼し, その可食部における毒量を検査した。</p> <p>&lt;結果&gt;</p> <p>令和2年度における貝毒による出荷自主規制状況を表1に, 出荷自主規制期間及び期間前後における貝毒原因プランクトンの出現状況と毒力の推移を図2に示した。令和2年度は, ウチノ海と阿南市の2海域で出荷自主規制の規準値(4MU/g)を超える麻痺性貝毒が検出された。ウチノ海では貝毒原因プランクトンとして<i>A. pacificum</i>(Group IV)が検出され, 出荷自主規制期間及び期間前後における最高細胞密度は60.0cells/ml, 最高毒力は8.9MU/gであった。また, 阿南市では<i>A. pacificum</i>(Group IV)と<i>A. catenella</i>(Group I)が交互または混在して検出され, 最高細胞密度は両種合計で132.0cells/ml, 最高毒力は25MU/gであった。</p> <p>&lt;今後の課題&gt;</p> <p>特になし</p> <p>&lt;次年度の計画&gt;</p> <p>継続する。</p> <p>&lt;結果の発表・活用状況等&gt;</p> <p>特になし</p>	

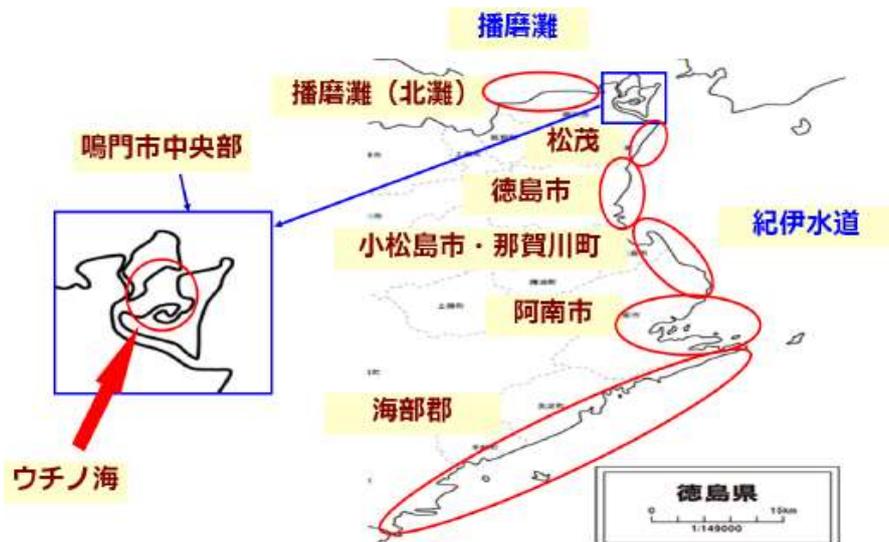


図1. 調査海域区分

表1. 令和2年度における貝毒による出荷自主規制状況

海域	貝種	最高毒力(MU/g)	出荷自主規制期間
ウチノ海	カキ	8.9	6/19~7/17
阿南市	カキ	25	4/27~6/4

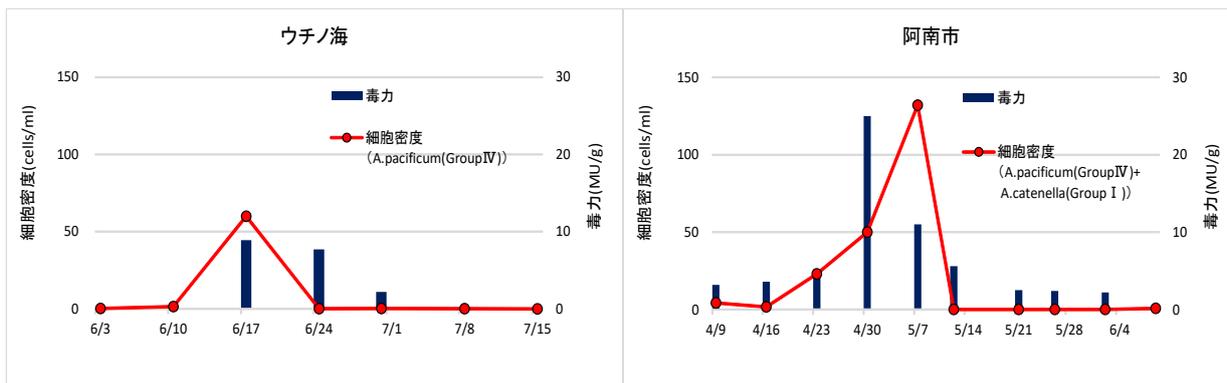


図2. 出荷自主規制期間及び期間前後における貝毒原因プランクトンの出現状況と毒力の推移